

## 戦前国語教科書の西鶴作品教材本文

——町人物の教材化とテキスト受容——

大久保 順 子

中等教育の国語教科書における西鶴浮世草子の教材採用は、古くは明治四十年代に遡り、大正期から昭和初期、さらに戦後から平成の現代に至るまでみられる。しかし、大正と昭和初期の国語教科書には、教材採用が有名作品に「標準化」<sup>①</sup>されつつあるという平成の今日の古典教材には見ることの少ない、様々な西鶴作品が採用されている。また、昭和十年代の中等学校国語教科書にみる『西鶴諸国ばなし』<sup>②</sup>「大晦日はあはぬ算用」の掲載本文の調査では、複数社の教科書の同一作品の本文に、原文や翻刻叢書本文と異なる改変箇所が見られ、そこには教科書編集者の本文参照の態度や作品観、また一種の「教育的配慮」のようなものも窺われた。比較的「原文に忠実な」今日の古典教材と比べるとかなりの「本文の改変」に見えるが、このような本文の校訂は当時、他の教材でも行われているのだろうか。本稿では、国語教材に採用された他の西鶴作品の本文例を具体的に検証し、それをもとに、教材としての作品の解釈と受容の様相について考察する。

既に有働裕や堀切実による西鶴浮世草子の教材採用教科書と作品一覧<sup>③</sup>が報告されている。これらをもとに、国立国会図書館デジタル資料、各大学附属図書館や各公共図書館の所蔵書および架蔵書を参照し、戦前の国語教科書の

本文を探索した。両氏の一覧にあるものの以外の西鶴作品の採用例も幾つか見られたので、本稿ではそのうちの二例の紹介を合わせて教科書本文の検証を行いたい。

## 一、『西鶴織留』巻二の四「塩うりの楽すけ」の教材本文

久松潜一編『新訂新女子國文 四年制 巻七』（至文堂、昭15・1訂正四版 ※昭12・6初版）には、『西鶴織留』巻二の四「塩うりの楽すけ」が採用されている。以下にその本文を引用する。（なお、本稿の以下の教科書本文の引用において、漢字の用字、ルビによる振り仮名、「・」の使用、句読点の位置、改行の位置などはすべて教科書本文に従う。傍線と番号は後の説明の便宜上、引用者が付したものである。）

### 二〇

鹽賣樂介

井原西鶴

粟田口神明の宮のほとりに、軒端に手のとゞく笹葺の庵を結び、夫婦住侘びて六十餘歳まで子のなきものの行末の悲しさは、女房は男の手業の沓を作りて窓の呉竹に結び添へ、大津に通ふ馬方に賣りて、渡世のたよりとなしぬ。男は毎日京に行きてはかり鹽を商賣して、やうく今日を暮し、明日の身の上をかまはず、宿に歸れば栗栖野小野の萩柴を折りくべて、山科の里芋に勸修寺の煎茶して、樂しみこれにきはめて、世にある人の榮華も羨むことなく、たゞ年中を夢の如く、正月に餅も搗かず、盆に鯖もすはらず、九月の節供近づけども栗・菊酒の用意もせず、取集める掛銀もなく、人に濟まする借錢もあらず。さても輕き身代、外より見ての苦しみ、内證の樂介格別ぞかし。

折ふしは九月八日、われ人、物前とて、足音常と變り、<sup>③</sup>京女もとりなりかまはず、道いそがしき世間はゞかりなく、中立賣の middle に、いづれの御服所とは知らず、表に十五六立ちつゞきたる家普請、今日棟あげの祝儀とて、幕うち廻して、金屏毛氈色を争ひ、庭には樽・肴持集ひて、帳附隙もなく、臺所の役人それぐに承り、一門の女中花を飾り、<sup>⑤</sup>面客は松竹の島臺廻して、酒宴始り、さまざまの藝づくしいづれも七盃機嫌の大笑止むこ

となし。番匠は烏帽子装束を改めて、白幣をかざし、鬼門よける弓矢をそなへ、拍子を揃へて棟の槌を打始め、萬歳樂と言葉を重ね、五百八十の餅を撒けば、これを拾ふ人大道も狭かりき。立止りて見る人毎に、かゝる作事をして世を渡るこそ長者なれ。あの如くして子孫に渡したき願なきは一人もなし。財寶に望なき人は何となく打眺めて通りぬ。立止る程の人は皆人の寶を數へて、殊更内藏に目を附けるは何の用にも立たぬ欲なり。

彼の鹽賣ばかりは家作の望もなく、よき聲して小唄に拍子踊を面白く、しばらく覗きて、見物皆々立退ける時、奥縞の財布を拾ひあげて、「これ落したる主はなきか。」といへば、年の頃五十餘りの法體ほつたいの人、「われ落しけるにもらかし給へ。」といふ。「成程返し申すべし。しかし疑ふにはあらねども、中には何が入りけるぞ。」といふ。「こまがね百目ばかりあり。」といふ。鹽賣大きに眼色變へて、「年にこそよれ、さてもさもしき心底なり。中は金子なればその方の物にはあらず。これ落したる人、わが宿にたづね給へ。」とまぎれなく所を觸れて歸りぬ。

その夜、室町通西行櫻の町菱屋といふ絹屋の手代たづねて、小判百二十両、西國問屋より受取り、主人の手前迷惑仕る段々ことわり申せば、「百二十両との書附に相違なし。」とて、何の惜氣もなく呉れけり。手代涙を流し喜ぶこと限りもなく、「外の手に渡らばよもやわれには歸るまじ。すぐに缺落の身を再び京都に歸る祝儀。」とて、そのうち小判五両禮物に置きければ、鹽賣なか／＼これを受けず、「これはそなたの金子にあらず。主人のものをわれに分けらるゝ故なし。申し受くること思ひもよらず。」とたび／＼返せば、是非なく取りて京に歸りぬ。

この手代その恩を忘れずして、それより後は雨風雪の日の難儀鹽賣京に出でかねる日は、人を頼み置き、定まつて鹽を二斗づつ買ひに遣はしければ、鹽屋は天の與へと喜び、かの手代がはたらきとは知らずして過ぎぬ。厚恩を忘れぬ心から、手代もその後はわが世の仕合はせ續きて、近年書繪小袖を仕出し俄分限となりぬ。

その頃また上京に隠れもなき名醫のありけるが、名人は必ず氣隨きずいにして、御所方への御出入をむつかしと、これも粟田口に引込み、靜かなる片原町に、物好の生垣奥ぶかに住みなし、ここも東海道なれば、諸大名の下

り上りにも、王城の忝さは、高腰かけて鼻唄歌へど、誰とがむることもなし。

この醫師、或時夕立しての後、下駄<sup>⑮</sup>ばきながらわが門に立ちて遠見せられしが、彼の鹽賣夕暮に京より歸るを見て、内に逃入り給ふを、各、不思議を立て、「あの鹽賣などに何としておそれ給ふぞ。」と尋ねければ、「あれは今の世の聖人なり。聖人に足駄はきながら對面するも畏<sup>⑮</sup>あり。また近づきならねば下駄ぬぐまでもなし。とかく御目にかゝらぬがよい。」と申さるゝ程に、「あの者を聖人とはいかなることぞ。」といへば、「それを見らずや。今の世、金子<sup>⑮</sup>を拾うて返すこと、そもや／＼廣い洛中洛外にもまたあるまじ。これ程の聖人唐土も見ぬこと。」と仰せられける程に、いづれも尤もと合點して、この鹽賣におそれ待るとなり。

(西鶴織留)

前稿の「大晦日はあはぬ算用」教材と同様に、影印資料〔西鶴選集影印編（おうふう）、近世文学資料類從（勉強社）他〕等で確認できる元禄刊本の原文（以下、対照で「刊」と記す）と比較すると、教科書本文の①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿に原文との違いが認められる。そこで、この教科書の出版以前の既刊の西鶴作品翻刻テキストのうち、次の本文との比較を行ってみる。

A 尾崎紅葉・渡部乙羽校訂『校訂西鶴全集』下巻（博文館、明27・6）

B 幸田露伴校訂『西鶴文集』（博文館、大2・1）

C 江戸文学研究会（代表蘇武利七）編『浮世草紙 卷の三』（向陵社、大4・12）

D 与謝野寛編纂、正宗敦夫・与謝野晶子校訂『日本古典全集 西鶴全集第三』（日本古典全集刊行会、大15・7）

E 藤井紫影校訂、有朋堂文庫『西鶴全集 下巻』（有朋堂書店、大3・1）

F 日本名著全集江戸文藝之部第一巻『西鶴名作集上』（日本名著全集刊行会、昭4・8）

まず、原文と違う箇所、例えば教科書本文の①「窓の呉竹に結び添へ、」は、元禄刊本とFが「窓のくれ竹に結<sup>いひ</sup>添<sup>そへ</sup>。」であるが、他の本と当該箇所を比較すると、

A B 窓のくれ竹に結<sup>ゆひ</sup>添<sup>そ</sup>へ、

C 窓のくれ竹に結<sup>ゆひ</sup>添<sup>そ</sup>へ、

D E 窓の呉竹に結び添へ、

すなわち原文に比較的近いFが「いひそへ」、A B D Eが「ゆひそへ」、Cと当該教科書が「結び添へ」（むすびそへ）という、異同が発生している。この箇所については、教科書はCの本文に近い。また、⑬喜ぶこと限りもなく、「〔刊〕A B C Fよろこぶ事のかぎりもなく／D喜ぶ事の限りもなく／E喜ぶ事限もなく」や、⑰下駄ばきながら「A B C D F下駄はきながら／E下駄ばきながら」は、Eに近い。

さらに、教材用の本文の改訂において漢字が平仮名か等、用字の変更が施される各箇所でもAとFと比較すると、②掲かず「〔刊〕AとFつかず」、④表に十五六「C表口十五六／〔刊〕A B D E F表口拾五六」、⑤面客「〔刊〕A B C F面客／DE表客」、⑥撒けば「B D 蒔けば／A C E 撒けば」、⑧奥稿「〔刊〕奥嶋／A C F 奥嶋／B D E 奥嶋」、⑩眼色變へて、「〔刊〕A B C F 眼色かへて／D E 顔色をかへて」、⑪小判百二十両「A C E 小判百二十両／〔刊〕B D F 小判百貳拾両」、⑭分けらるゝ故なし「A B C D E わけらるゝゆゑなし／F わけらるゝゆゑなし」、⑮氣隨にして「B D E 氣隨にして／C 氣ずゐにして／原A F 氣ずいにして」、⑯畏あり「原A B C F おそれあり／D E 恐れあり」といった異同がある。比較的CやEとの共通性が見られ、それらの翻刻を参照した可能性が考えられる。

一方、当時の他の翻刻テキストにはない当該教科書の独自の本文箇所も幾つか見受けられる。③「足音常と變り、京女もとりなりかまはず、」の箇所では、

〔刊〕足音つねとは替り、被きたる御所染すがたの京女蔭も。とりなりかまはず  
A 足音つねとは替り、被きたる御所染すがたの京女蔭も。とりなりかまはず  
B 足音つねとは替り、被きたる御所染すがたの京女蔭も。とりなりかまはず  
C 足音つねとは替り、被きたる御所染すがたの京女蔭も。とりなりかまはず  
D 足音つねとは替り、被きたる御所染すがたの京女蔭も。とりなりかまはず  
E 足音つねとは變り、被きたる御所染すがたの京女蔭も。とりなりかまはず

F 足音<sup>あしおと</sup>つねとは替<sup>かは</sup>り。被<sup>か</sup>きたる御所<sup>ごしよ</sup>染<sup>そめ</sup>すがたの京女<sup>きやうにょ</sup>臈<sup>ろう</sup>も。とりなりかまはず

のとおり、当時既刊のA―Fいずれもが（振り仮名等の小さな違いはあるものの）ほぼ原文通り「被きたる御所染」京女臈（京女郎）とするのに対し、教科書本文では簡略な「京女」という表現になっている。同様に、教科書本文のみが⑨疑ふにはあらねども、「（刊）ABC Fうたがふにはあらねど／DE疑ふにはあらねど」、⑩返すこと、そもや「（刊）ABFかへす事がそもや／CDEかへす事が、そもや」等があり、文中の助詞の加減によるリズムの整え方など、編集者の本文の解釈が反映された改変が施されていると考えられる。また、⑫「何の惜氣もなく呉れけり」。「（刊）ACF「何のをしげもなふくれける。／BDE「何のをしげもなうくれける。」の場合は、西鶴作品の文体に多い「連体形終止」の文末を、国語教材として文法的に破格のない終止形に整理したものとみられる。

教科書編集者の改訂の意図が特に強く窺える本文の箇所は、⑬「この醫師」である。元禄刊本とA―Fはすべて、「この法師（此法師）」である。「法師」は、法体の「醫師」と同一の登場人物であり、異なる呼称で示している。教科書の本文読解上、学習者にわかりやすく同一の呼称「醫師」として改訂した可能性がある。

原文と比べて最も大きな改変部分は、教科書本文の⑭「彼の鹽賣ばかりは」の直前、すなわち前文の「欲なり。」の後に続く次の部分（原文）の削除である。

此あるじも二十年以前までは挑灯<sup>ちやうちん</sup>のはりがへして。火ふく力もなかりしが何から分限<sup>ぶんげん</sup>にならぬといふことなし。すこしの事に氣<sup>き</sup>をつけて渋油<sup>しぶあぶら</sup>にきらを引て。雨夜<sup>あまよ</sup>のちやうちんといふを始めて。今七千貫目持<sup>もち</sup>と世間のさしづに違<sup>ちが</sup>ひなし。おさかきたこの手せし人にもあらねば。都にも昔は大かたに吟味<sup>ぎんみ</sup>して。歴々<sup>れききく</sup>の縁組<sup>えんぐみ</sup>せし事言ふもくどけとも菟角世<sup>とがく</sup>は銀<sup>かね</sup>のひかりぞかし。

（※Fより引用）

塩売が金子を拾う場所Ⅱ「中立賣」の棟上をする七千貫目持ちの「あるじ」の成功譚の部分である。分量の比較的多い一話であるための省略の可能性もあるが、この箇所が除かれた教科書本文では、前半が塩売と僧と手代の話、後半が上京の名医の話と、大きく二つに把握される内容について、各段の展開の流れを読解していく、といった指導が想定される。

## 二、『西鶴俗つれづれ』巻一の二「過ぎて能きは親の異見悪しきは酒」の教材本文

佐々政一編（大町芳衛・武島又二郎・杉敏介補修）『新訂 新撰國語読本 巻九』（明治書院、大14・1訂正発行※初版大13・10）には、『西鶴俗つれづれ』巻一の二「過ぎて善きは親の異見悪しきは酒」が採用されている。以下はその本文である。

### 一〇 過ぎて良きは親の意見悪しきは酒

① 新春の御慶、何方も御同然の中、今年の正月が仕納めの親爺にも、「若うならしやりました。」と、定まつた口上を互に言葉③④で通る。方方の御杯、飲まぬ様なれど、目出度申し納むる所で押へられ、重ね重ね祝はれ、「日頃解飲は。」といふさへ、はやわけも聞えず、肩衣が臂に懸るやら、袴の腰が曲むやら、扇はどこで落したか、雪踏⑤をはきかへ、溝に踏被り、禮に行かいても苦しからぬ所へ行きて、二三年前の御力落しを弔ひ、善からぬ事のみ盡して、今朝の七つに出で、夕の黄昏まで辿り行き、跣足⑥なる方に草履はきて、鼻紙まで失ひ、逆鬢になり、勝負事に打毫けたる體してによりりと歸り、正月早早から酔覺の機嫌悪しく、冷水四五杯息急しく飲むと、あたりあひの枕引寄せ、大駢して、一日の酔狂夢にや見らむ。

然るにこの親爺なる人は格別の思ひ入れ、常子供に言含めらるるは、「われ無常時到りて、臨終の時節急なる時には言ふ事も難からむ。別の仔細無し、唯、酒をやめて、月忌・命日の齋・非時にも固く酒鹽の入りたる料理する事なく、家の内には壺・平皿の蓋も杯に似たる物を置かず、門に禁酒の札を石に彫りて建つべし。この言ひおきより外なし。昨日も日暮小太夫で説經を聞けば、あれほど力も強く利發なる小栗殿も、横山に盛殺され給ふ。何を見ても聞いても、己のいふ事に違ふ事はあるまじ。されども兼好とやらいふ者が、若き者の諺に『下戸ならぬこそ。』と、異なことを書いて言ひならはせぬ。まだ生きて居らば、公事をしてなりとも、只は置かじと思へど、今は亡き後の記念の草子、聞くさへ疏まし。この頃、近所に酒盛があるやら、頭痛がして。」と、顰めらるる顔色、もう合點がいたかと思ふ尻眼づかひ、身の毛よだちて、嫌ながら聴きたるが、今金言と



なりて、よく聞入れたるしるしに、二番目に生れながら、確なる親の跡をふまへ、俵の數、藏に積みて、金袋を擔げさせ、言ふ事に槌のきくも、焙烙頭巾<sup>⑧</sup>を被りて意見たらたら言はれし親爺の御蔭、過分至極なり。

兄に生れたる者は、世間からも親の眼鏡に外れし者と、心ある人には鼻<sup>⑨</sup>であしらはれ、交り疏くなりゆけば、類を以て集まる男、酒一杯飲めば、その日の榮耀これに過ぎずと、面面の務むべき事懈るのみならず、その心からの慰み事、一つも良からぬたくみ、手を懷に入れて世を渡る才覺、様樣恐しき事ども、現世・後生ともに取失ひ、たつた今の事、見るやうな。(井原西鶴——俗徒然)

本話は『俗つれづれ』巻頭の短い一話である。前半に「醉狂」の乱れた姿が描かれてもいるが、卜部兼好『徒然草』第一弾との関連も指導でき、後半の「教訓」の戒める江戸時代の町人の生活模様を読み解こうとする教材とみられる。

この本文を比較する翻刻テキストとして前出のAとCとFを用いる。B幸田露伴校訂『西鶴文集』には『西鶴俗つれづれ』が収められていない。また、國民文庫『元祿時代小説集下』(國民文庫刊行會、大3・8四版、※明44・3初版)「緒言」の「西鶴俗徒然」解説によると、「俗徒然には五冊本と四冊本とあり、四冊本は、五冊本の卷一を除き、卷五を卷一とせるものなり。これ、もと五冊本なりしを、後にかく改め、新出版物の如くして世を欺きし書肆の奸策なるべきか。予は遂に五冊本を得ざりしをもて、遺憾ながら本書には、京五條通青山為兵衛版の四冊本を収めたり。」(明治四十四年新陽 校訂者古谷知新識)とあり、所収の「西鶴俗徒然」には本話の本文を欠く。そこでAとCの間に刊行された、本話の収録のある

G鈴木種次郎編『袖珍文庫40 西鶴物(一)』(三教書院、明45・3)の翻刻本文を参照し、教科書本文が特に原文と異なる①②の箇所について、AGCDEFを比較する。

このうち④「日頃解飲は」③「記念の草子」のような、明らかに原文には存在しない用字の箇所について各翻刻テキストを比較すると、まず④「日頃解飲は」は(刊)及びDEFが「日比<sup>ひごろ</sup>なるものは」であるのに対し、AGが「日頃解飲<sup>なるもの</sup>は」、Cが「日頃解飲<sup>ひごろなるもの</sup>は」である。また、



⑧今は亡き後の記念の草子、聞くさへ疎まし。

(刊)今はなき跡の形の草子きくさへうとまし。

A今は亡き後の記念の草紙、聞くさへ疎まし。

G今は亡き後の記念の草紙、聞くさへ疎まし。

C今は亡き後の記念の草紙、聞くさへ疎まし。

D今は亡き後の形見の草子、聞くさへ疎まし。

E今は亡き後の形見の草子、聞くさへ疎まし。

F今はなき跡の形の草子聞くさへ疎まし。

では、(刊)とFの「形み」、DEの「形見」に対し、AGは「記念」、C「記念」である。原文で「なるもの」「形み」であったものにA以降の校訂者が「解飲」「記念」と漢字を当て、Cの場合は「きねん」の読みまで起こっているとみられる。⑧教科書の用字「草子」は原文通りであり、原文や複数の翻刻テキストを合わせた参照か、教科書自身の用字の選択の可能性もある。が、④⑧の表記(振り仮名はない)の「解飲」や「記念」の用字は、このAG C等の方の本文等を参照したために発生しているのではないか。他の用字の箇所では、

⑤夕の黄昏まで辿り行き

(刊)夕のたそかれまでたとり歩行。

A夕の黄昏まで辿り行き、

G夕の黄昏まで辿り行き、

C夕の黄昏まで辿り行き

D夕の黄昏まで辿り歩り行き、

E夕の黄昏まで辿り歩り行き、

F夕のたそかれまでたとり歩行。

の場合は、原文の「たどり歩行」がA以降の翻刻の校訂で「辿（り）行き」となり、さらにC「辿り行き」の発生につながったとみられる。「歩」ではなく「辿」「行」の方を用いる教科書本文⑧も、A G Cの方の用字を参照している可能性が考えられる。

⑨と、顰めらるる顔色、もう合點がいたかと思ふ尻眼づかひ、

（刊）としかめらるる貞つき、取合點がいたかと思ふしり目つかひ

Aと顰めらるる顔色、もう合點がいたかと思ふ尻眼づかひ、

Gと顰めらるる顔色、もう合點がいたかと思ふ尻眼づかひ、

Cと顰めらるる顔色、もう合點がいたかと思ふ尻眼づかひ、

Dと、顰めらるる貞付きも、合點が行たかと思ふ尻眼遣ひ、

Eと顰めらるる顔つきも、合點がいたかと思ふ尻眼づかひ、

Fとしかめらるる貞つき。取合點がいたかと思ふしり眼づかひ

この箇所について、原文「貞つき、取合點が」をFは漢字及び文節の切り方で共に「原文通り」に翻刻するが、他の諸本での校訂の行い方は、大まかにA G CとD Eとに分かれる。A G Cは「かほつき」の語に「顔色」の漢字を当て、そこで文節を句切り、「最」以下を「もう合點が」と校訂している（Cは「顔色」に原文にない「かほいろ」の訓みを当てている）。一方、D Eは「かほつき」の語は原文通りとしつつ、「顔つきも」で文節を句切っている。そして⑨教科書本文はA G Cの翻刻の示すような解釈を採用していることになる。この他にも、

⑩焙烙頭巾を被りて 「刊」 F 土釜頭巾を被て／A C 焙烙頭巾を被りて／G 焙烙頭巾を被つて／D E 土釜頭巾を被つて」

⑦息急しく 「刊」 息せはしなく／A G C 息急しく／D E 息急しく／F 息せはしく」

⑪鼻であしらはれ 「刊」 A G D E F 鼻であしらはれ／C 鼻であしらはれ」

等の箇所から、この教科書本文の場合は、複数の翻刻を参照しつつも全体的にはA G Cの方の影響を大きく受けた

ものと考えられる。

他の翻刻テキストと比較して、この教科書本文だけが持つ記述の箇所は、例えば

⑥勝負事に打毫けたる體してによりりと歸り、

〔刊〕博奕に打ち毫けたる躰して如鷺狸とかへり、

AG博奕に打ち毫けたる體して如鷺狸と歸り、

C博奕に打ち毫けたる體して如鷺狸と歸り

D博奕に打毫けたる躰して如鷺狸と歸り、

E博奕に打毫けたる躰して如鷺狸と歸り、

F博奕に打ち毫けたる躰して如鷺狸とかへり。

にみられる。まず、どの翻刻テキストも記す原文の「博奕」という用語が、教科書では「勝負事」という語に改められている。「博奕」は中等国語教育の教科書本文に現れる用語として不穏当なものと意識されたものか。また、「體して」を用いる点で本文はAGCに近いが、原文と翻刻テキストでの「如鷺狸」を、教科書では平仮名表記の「によりり」にしている。同様に、

①「新春の御慶、何方も御同然の中」、「〔刊〕及びAGEF「新春の御吉慶何方も御同前の中」、C「御吉慶御同前」、D「御吉慶御同前」教科書本文のみ「御吉慶」を「御慶」に、「御同前」を「御同然」としている。

②「親爺」〔刊〕「親仁」／AGCDEF「親仁」教科書本文のみ「爺」の字を用いる。

③言葉てて「〔刊〕F云捨て／G謂ひ捨て、／AC謂ひすて、／D云ひ捨てて／Eいひすて、」（※用字はF以外の諸本でまちまちに異なる。）

⑫様様恐しき事ども、「〔原〕Fさま／こはき事共／AG様々恐しき事ども／C種々恐しき事ども／DEさまさま恐しき事ども、」※「こはき」を教科書は「おそろしき」とする。

等も、教科書本文にしか見られない箇所である。これらは教材として意味をわかりやすくするためか、教科書編集

者の判断によつて行われた語句の改訂である可能性がある。

### 三、『世間胸算用』卷一の四「鼠の文づかひ」の教材本文

採用例の少ない前掲の二作品と比べ、次に掲げる『世間胸算用』卷一の四「鼠の文づかひ」は、戦前戦後通じて国語教科書に複数の採用例のみられるもので、隠居の母親の滑稽な吝嗇ぶりが際立つ有名な一話である。まず、吉田弥平編『中學國文教科書 卷十 修正二十一版』（光風館書店、昭6・12※初版〔明39・10〕には掲載無し）からの本文を引用する（用字や改行箇所等は本文のとおり、傍線と番号は引用者による）。なお、この本文は光風館編輯所編『中學國文教科書教授備考 卷十』（光風館書店、昭7・11修正三版※初版大15・4）「一八 鼠の文づかひ（『世間胸算用』）」にも掲載がある。

一八

鼠の文づかひ

井原西鶴

毎年煤拂は極月十三日に定めて、旦那寺の笹竹を祝物とて、月の數十二本もらひて、煤を拂ひての跡を取り、葺屋根の押へ竹に使ひ、枝は箒に結はせて、塵も埃も捨てぬ、随分細かなる人ありける。過ぎし年は十三日に忙しく、大晦日に煤はきて、年一度の水風呂を焚かれしに、五月の粽のから、盆の蓮の葉までも段々に溜置き、湯の沸くにちがひはなしとて、細かなる事に氣をつけて、世の費穿鑿<sup>つひえんさく</sup>、人に過ぎて利發顔する男あり。同じ屋敷の裏に、隠居建てて母親の住まれしが、此の男うまれたる母なれば、其の吝きこと限なし。塗下駄片足なるを、水風呂の下へ焚く時、つくぐ昔を思ひ出し、誠に此の木履は、我が十八の時、此の家に嫁入せし時、雜<sup>ざ</sup>長持<sup>ながもち</sup>に入れて來て、それから雨にも雪にも履きて、齒<sup>は</sup>のちびたるばかり、五十三年になりぬ。我が一代は一寸にて埒を明けんと思ひしに、惜しや片足は野良犬めにくはへられ、端<sup>はした</sup>になりて是非もなく、今日煙になすことよ。」と四五度も繰言をいひて、其の後、釜の中へ投捨てられ、今一つ何やら物思ひの風情して、泪をはらくとこぼし、「世に月日のたつは夢ぢや、明日はそのむかはりなるが、惜しい事をしました。」と、しばし歎のや

み難し。

折節近所の醫者水風呂に入られしが、「先づ以て目出たき年の暮なれば御なげきをやめさせたまへ。してそれは元日に何人の御死去なされた。」と尋ねられしに、「いかに愚痴なればとて、人の生死をこれ程に歎く事はござらぬ。私の惜むは、去年の元日に、堺の妹が禮に參つて、年玉銀一包くれしを、何程か嬉しく、吉方棚へ上げ置きしに、その夜盗まれました。そもや勝手知らぬ者の取る事ではござらぬ。其の後色々の願を諸神に懸けましたれども、その効もなし。又山伏に祈を頼みましたれば、此の銀七日の中に出ますれば、檀の上なる御幣が搖ぎ、御燈が次第に消えますが、大願の成就せし驗といひける。案の如く祈最中に御幣搖ぎ出で、燈火微かになりて消えける。これは神佛の事、末世ならず有難き御事と思ひ、御初穂百二十上げて、七日待てども此の銀は出ず。さる人に語りければ、『それは盗人に追といふものなり。今時仕懸山伏とて、さまぐ護摩の壇に操いたし、白紙人形に土佐踊さすなど此の前松田といふ放下師がしたる事なれども、皆人賢過ぎて、結句近き事にはまりぬ。其の御幣の搖ぎ出るは、立ておきたる岩座に壺ありて其の中に鱒を生けおきける。數珠さらくと押揉んで東方に西方にと、獨鉗・錫杖にて佛壇を荒けなく打てば、鱒がこれに驚き、上を下へと騒ぎ、幣串に當れば、暫く搖ぎて、知らぬ目からは恐し。又燈明は臺に砂時計をしかけ、油を拔取ることぞ。』と、此の物語を聞くから、愈々損の上の損を致した。我此の年まで錢一文遣さず暮せしに、今年の大晦日は此の銀の見えぬ故、胸算用違ひて、心がかりの正月を致せば、萬づの事面白からず。」と、世の外間も構はず大聲揚げて泣かれければ、家内の者ども興をさまし、我々疑はるゝ事の迷惑と、心々に諸神に祈誓を懸ける。大方煤も掃きしまひて、屋根裏まで檢めける時、棟木の間より杉原紙の一包を探し出し、よくく見れば、隱居の尋ねらるる年玉銀に紛れなし。「人の盗まぬ物は出まするぞ、さる程に悪い鼠め。」といへば、お祖母中々合點せられず、「これ程遠歩きする鼠を見た事なし、頭の黒い鼠の業、これからは油斷のならぬ事。」と、疊たゝきて喚かれけり。(胸算用)

教科書本文は卷一の四の冒頭から途中まで、一話の中の前半の一部を扱う。末尾の⑱「疊たゝきて喚かれけり。」

は、原文の「疊たゝきてわめかれければ」を改変して結んでいる。前掲の指導書『中學國文教科書 教授備考 修正二十一版』「一八 鼠の文づかひ」でも、本文は「前半からの抜粹」として解説されている。前半部だけでも、母親の吝嗇と失った金子への執着ぶり、騙された模様と金子が発見されるまでのユーモラスな場面を読み取ることができる。教材とする部分が全文か一部かについては、各社教科書の教材化の方針に拠るものとみられる。戦前の教科書では三省堂編輯部編『女子新國語讀本 卷九』（同 教授參考書 卷九）三省堂、昭9・7参照）等に、卷一の四の全文が採られている。なお、戦後の国語教科書の「鼠の文づかひ」の採用例として

X岡本明編『新編古文 三』（大阪教育図書、昭32）

Y市古貞次他編『精選 国語II 二訂版』（明治書院、平4・1）

Z平岡敏夫他編『高等学校 国語II』（大修館書店、平13・4三版、※平11・4初版）  
等があり、このXYZの場合はいずれも一話全文を採用した教材である。

以下、吉田弥平編『中學國文教科書』修正二十一版掲載「鼠の文づかひ」の本文について、『西鶴織留』の場合と同様に、当時の『世間胸算用』の翻刻テキストA～Fを参照しつつ検討する。元より『世間胸算用』元禄五年刊本の原文には句点が無く、「原文通り」の本文再現を編集方針に謳うFの本文にも句読点や句切れが無い。他のA～Eの翻刻テキストの諸本と教科書の場合は、校訂者の文節の判断によって本文に句読点が付される。

①「煤を拂ひての跡を取り、葺屋根の押へ竹に使用」の箇所は、次のとおりである。

(刊) 煤すすを拂はらひひての跡あとを取とり葺ふき根ねの押おさへ竹たけにつかひ

A 煤すすを拂はらひての跡あとを取とり葺ふき根ねの押おさへ竹たけに使つかひ、

B 煤すすを拂はらひての跡あとを取とり葺ふき根ねの押おさへ竹たけにつかひ、

C 煤すすを拂はらひての跡あとを取とり葺ふき根ねの押おさへ竹たけに使つかひ、

D 煤すすを拂はらひての跡あとを取とり葺ふき根ねの押おさへ竹たけに使つかひ、

E 煤すすを拂はらひての跡あとを取とり葺ふき根ねの押おさへ竹たけに使つかひ、

F 煤<sup>すす</sup>を拂<sup>はら</sup>ての跡<sup>あと</sup>を取<sup>と</sup>葺<sup>ふ</sup>屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>の押<sup>お</sup>へ竹<sup>たけ</sup>につかひ

刊本の原文とFが句読点の無い形を残し、Bはこの箇所では「つかひ」まで読点の無い形であるが、A及びCのEの翻刻の校訂では「跡を取り」で句切り「葺屋根の」から文章が続く。だが、現在の翻刻テキストの校訂では「取葺屋根」（屋根の形状の名称）を一つの語句と解釈することが一般的である。前出の戦後の教科書の例では、

X 煤を払ひてのあとを、取<sup>と</sup>葺<sup>ふ</sup>屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>の押<sup>お</sup>へ竹<sup>たけ</sup>に使ひ、

Y 煤を払ひてのあとを取り<sup>と</sup>葺<sup>ふ</sup>屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>の押<sup>お</sup>さへ竹<sup>たけ</sup>に使ひ、

Z 煤を払ひてのあとを取り<sup>と</sup>葺<sup>ふ</sup>屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>の押<sup>お</sup>さへ竹<sup>たけ</sup>に使ひ、

とし、X頭注「屋根に薄い板をふきならべ、おさえに竹や丸太をおいたもの。」（P.36）、Y脚注「4取り葺き屋根——木を薄くそいで作った小さな板を並べ、竹や木で上を押さえた屋根。」（262ページ）、Z脚注「③取り葺き屋根——そいだ薄い板を並べて、石、丸太、竹などで押さえた屋根。」（P.258）とそれぞれ解説される。戦後では「そぎ板で葺いて丸太や竹で押へた屋根。」（『定本西鶴全集 第七卷』中央公論社、昭25・12、『世間胸算用』巻一の四頭注）をはじめ、諸翻刻テキストの注釈で「取葺屋根」と解釈され、前掲XYZに見るような教科書本文や注に反映されているとみてよいだろう。

「取葺屋根」の解釈に基づく本文の注釈や校訂について、前掲EやFの後の、昭和前期の翻刻テキストの本文を辿ってみる。近代日本文学大系『井原西鶴集』（笹川種郎解題、國民圖書株式会社、昭2・3）の『世間胸算用』巻一「四 鼠の文づかひ」の校訂本文ではまだ「煤を拂ひての跡を取り、葺屋根の抑へ竹に使ひ、」であり、「葺屋根」としている。

この後、和田万吉校註の岩波文庫『世間胸算用』（岩波書店、昭3・1 ※教科書版昭7・4）も、「文法語格その他西鶴の文章の特異をあらはすものは悉皆本の儘にして私意を加へざることは、本文庫に収めた同一作者の諸書と同じである。」「亦本書に於て句讀點の痕を滅したことも不思議に思はれようが、此も原本の倂を傳へる為に態としたのである。」「（はしがき（昭和二年十月 校訂者識す））」として、句読点のない原本の本文の形をF日本名著全



集本と同様に尊重してか、点を入れない翻刻本文としている。帝国文庫第二十一篇『西鶴全集後』（博文館、昭5・12）の藤村作の校訂でも、終止形や文末にのみ句点（。）を入れる方法を取り、「跡を取葺屋ねの」の箇所はそのまま、読点をつけない表記とする。

注釈の面では、額原退蔵『校註 世間胸算用』（明治書院、昭5・2）で本文を「煤を拂ひての跡を、取葺屋根の押へ竹に使用」とし、頭注「○取葺屋根——屋根にそぎ板を並べて石や丸太等を押へにしたものをいふ。」（一九頁）を置く。山崎麓編『西鶴文撰集』（山海堂書籍部、昭8・7）所収の「鼠の文づかひ」本文でも「煤を拂ひての後を、取葺屋根の押へ竹に使用」と、読点を入れている。藤井乙男『西鶴名作集』（評釋江戸文学叢書第一卷、講談社、昭10・7）所収『世間胸算用』卷一の四も本文を「煤を拂ひての跡を、取葺屋根の押へ竹に使用」とし、頭注は「○取り葺屋根 板屋の上に石や丸太又は竹などで押へをしたものをいふ。（『和漢三才圖會』）（五八二頁）」とする。市場直次郎『世間胸算用全釋』（文泉堂書房、昭10・9）卷一の四も「煤を拂ひての跡を、取葺（取葺）屋根の押へ竹につかひ」とし、「語釋」「○取葺屋根」項目には「葺は葺の宛字。『日本永代蔵』卷三には、「取葺の屋根の輪」云々とある。そぎ板を並べて、石や丸太等を押へにした屋根で、今でも海濱山間等の僻村に見る所である。押への石や丸太等が轉落しないための用に竹で輪を作つて石の下に敷く。即ち押へ竹で、これを煤竹で利用したといふのである。」（五七頁）とする。

このように「文壇・学界が東西相呼応して盛り立てた」「西鶴復興第四期」である昭和初期において、「取葺屋根」の注釈は当時の研究成果とみられる。『中學國文教科書』修正二十一版の「鼠の文づかひ」は、そのような昭和初期の『世間胸算用』注釈研究の進展の途中の時期に教科書に採られており、本文にはその成果がまだ反映されていないと考えられる。

また、⑰「砂時計をしかけ」〔刊〕BDEF砂時計を仕くはし／AC砂時計を仕懸けの箇所をみると、原文は近世語「しくはす」（※日葡辞書「sicuaxe」、木材を他の木材にかみ合わせるように、ものをかみ合わせる）であるが、当該教科書本文はACと共通して「しかけ」としている。前出の⑱「疊たゝきて喚かれけり。」も、「ACE

量たたきて喚かれければ／BF量たゝきてわめかれければ／D量叩きて喚かれければ」と比較すると、原文よりも校訂された用字を採っている。

細かな用字の違いについては、各翻刻書で次のような異同がみられる。

③我が十八〔刊〕BFわれ十八／AE我十八／C我十八／D我れ十八

④齒の〔刊〕F羽の／ABCD齒の／E齒の

⑤何人の〔刊〕BFどなたの／ACDE何人の

⑥愚痴〔刊〕BF愚智／ACDE愚痴

⑪御初穂百二十〔刊〕Fお初尾百式十／ABCDEお初穂百二十

⑬今時仕懸山伏〔原〕BF今時は仕かけ山伏／ACDE今時仕懸山伏

⑭鱸〔刊〕F鯒／ACDE鱸／B鯒

⑮獨鉆・錫杖〔刊〕Fとつかう鉆杖／A獨鉆錫杖／BE獨鉆錫杖／CD獨鉆錫杖

⑱検めける時〔刊〕／ACDE検めける時／BFあらためける時

この教科書本文の場合、必ずしもFのように原文の字句に忠実な表記ではなく、ACDEなど改訂された翻刻本文に共通する漢字の用字を行っている。特に「齒」「初穂」「獨鉆」の例など、意味の取りやすい漢字の方に当てる傾向をみることができる。

さらに教科書本文にのみみられる語句や文章の改変箇所には、

②細かなる事〔刊〕Fこまかな事／A細な事／CDE細かな事／Bこまかな事

⑧吉方棚〔刊〕え方棚／ABCDE恵方棚／F元方棚

等がある。⑦「これ程に歎く事は」は、刊本やA、Fの翻刻すべてが「事ではござらぬ」としている箇所である。また、⑨「色々の願を諸神に懸けましたれども、その効もなし」も原文や諸翻刻では「諸神に懸けましたれども」である。

なお、原文の「うごき」を諸翻刻にはない「搖ぎ」と表記する箇所が、この教科書本文では

⑩ 御幣が搖ぎ 「〔刊〕BF御幣がうごき／AC御幣が動き、／DE御幣が動き」

⑬ 搖ぎ出るは 「〔刊〕BFうごき出るは／A動出づるは、／CDE動き出づるは」

⑯ 暫く搖ぎて 「〔刊〕ABCF動きて／DE動きて」

のように複数みられ、教科書の本文校訂の際にもたらされた用字である可能性がある。

明治二十年代、「簗村・寒月・紅葉・露伴らの元禄復興文学は、他面あいつぐ西鶴本の翻刻を促し」、「二八年（一八九五）までに西鶴浮世草子の大半は活字出版されるに至る」状況であったという。だが、本格的な本文注釈研究はその後の大正く昭和初期によりやく進展した模様であり、その一方の国語教育の「文学教育」「日本文学史の指導」の趨勢の中で、西鶴作品の教材化も進む。戦前の国語教科書の西鶴作品教材本文に比較的多く見出される「原文との違い」は、その状況の実態を物語るものと考えられる。原文と異なる用字や振り仮名の改変については、当時の教科書が参照しているとみられる翻刻テキストの影響、もしくは教科書教材の独自の改訂、と考えられるものが少なからずある。文法の破格の調整を含め、何らかの理由でアレンジされたとみられる部分には「国語教材」としての編集上の留意が働いているとみられ、戦前の国語教科書独特の「西鶴作品のテキスト」の発生を認めることもできる。

影印資料や資料画像アーカイブ、『定本西鶴全集』等の翻刻テキストで、西鶴作品を「原文」で読めると意識している今日の読者から見ると、これらの「原文のままではない」ような改変は異様に映るかもしれない。しかし大正期く昭和初期は、西鶴作品の価値を近代文学の作家や研究者らが発見し「復活」させた明治期からも程近い。国語教材として採用される西鶴作品も未だ「固定化」には到らず、浮世草子という文学の「何が教材化されうるか」が、教科書編著者らに摸索探究されていたとみられる。今後も研究史や「近世文学」の作品観・指導観等との関係において教材例を捉え、検討を行いたい。

## 注

- (1) 都築則幸「旧制中学校における国文学史教育の変遷——明治末期から昭和前期を中心に——」(『国語科教育』74、平25・9)
- (2) 拙稿「国語教材「大晦日はあはぬ算用」の変遷と本文受容」(福岡女子大学文学部国際文理学部紀要『文芸と思想』77、平25・2)
- (3) 有働裕「教材としての西鶴作品——変遷とその意味——」(『愛知教育大学教科教育センター研究報告』15、平3・3)、堀切実「西鶴と古典教育——『本朝二十不孝』教材化案——」(『西鶴と浮世草子研究』1、平18・6)等。
- (4) 高瀬正一「『在京日記』における係り結びと連体形終止」(『愛知教育大学国語国文学報』70、平24・3)
- (5) 竹野静雄「西鶴復活——現代文学」、『西鶴事典』15 西鶴の影響と享受(おうふう、平8・12)所収
- (6) 竹野静雄「西鶴復活——近代文学Ⅱ」、『(5) 同書。
- (7) 拙稿「戦前の国語教科書と西鶴浮世草子——「蚤の籠ぬけ」教材と作品受容——」(『日本文学』63-1、平26・1)

